

山形県からのおくりもの

～ もっと優しく、もっと賢い子どもたちをめざして～

豊中市立螢池小学校 教諭 中島 明日香

1.はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境はさまざまに変化している。その一つとして、核家族化が進み、祖父母と一緒に住んでいない、兄弟姉妹がいないというだけでなく、一緒に住んでいる父は実の父親ではない、兄弟姉妹と親が違うという子どもたちが少なからずいる。そのような環境の中で、自分のことを大切にしてもらえないと感じたり、人のことを信じていいのかなど疑心暗鬼になって自分を苦しめたりする現実があるように思う。子どもたちの不登校件数も増え続け、大人になって引きこもっている人の中には、小中学生の頃に不登校経験のある人が多いという現実を聞くと、小学校時代に人とのつながりの心地よさを感じ、「人って信じて良いんだな」と思わせる機会を作ることとはとても大切なことだと思う。

私はできるだけ多くの子が、人とのつながりのよさを感じてくれるようにと心がけながら子どもたちに接するようにしている。しかし、子どもたちが生きていく場は学校だけではなく、家庭・地域・社会にある。学校を卒業すれば、社会の一員として生活していくことになる。学校で感じた心地よさは、学校だけのものだったということにならないように、どんな生活環境にある子どもたちとも、地域や社会の人たちとの素敵な出会いの場を授業の中で作っていくことが重要であると考えている。

また最近では、たくさんの情報を子どもたちが簡単に得られるようになった。様々な情報が善し悪しに関係なく注がれる今、得られた情報を取捨選択する力を養うためには、子どもの頃から本物に出会う喜びと感動を得る経験をするのが大切であると考えている。

ここでは、2年間に亘って子どもたちが本物と出会いながら学校行事や学習に取り組む様子と、その取り組みの中で子どもたちが学び、成長したことについてまとめたい。

2.子どもたちの姿

4年生で初めて出会った2クラス63人の子どもたちは、それまでの3年間で転出入もあまりなく、人間関係はある程度固定化されていると思わせるような雰囲気

のある学年であった。同じクラスの全盲の児童Aに対して、ごく自然に関われる優しさが一部の子にはあった。休み時間に廊下をじゃれあいながら歩いている、階段のところにさしかかると、ふとそのじゃれあいをやめ、「階段な～!」とサポートする姿があった。

その一方で、「この子はこういう子なんだ」というレッテルを張り合い、「3年生でもこんなことがあったし…」と過去のことを出しながら、もめている集団があった。「友だちがにらんでくる…」と勝手に思ったり、寂しそうに「どうせ私のこと、嫌いなんでしょ…」と決めつけたりして、友だち関係に自信を持ってない子どもたちの姿が気になった。また、家庭環境が厳しく、母親がいないことで寂しい思いをしていたり、父親がいないことに対してあえて強がって見せたりしている子どももいた。また、学習が一気に難しくなり、今まではみんなと同じようにできていると感じていたのに、差を感じ始め、できない自分に対する劣等感からイライラがつのり、自分の気持ちをコントロールできなくて叫んだり授業を抜け出したりしてしまう子どももいた。中学受験を目指して、遅くまで塾に通い詰め、しんどい思いと闘っている姿もあった。本当は、みんなと気持ちよく学校生活を送りたいのに、それができない現実を子どもたちの中から感じるが多々あった。



4年生の学年目標

学年みんなが、友だちに対する優しさをもっともって欲しい。学習だけでなく、学校生活を上手く送ることができるように、そして、いろいろと考えながら行動できる子どもになって欲しいという思いをこめて、4年生の学年目標を「もっと優しく、もっと賢い4年生に!」として1年

間掲示し、学年みんなで同じ方向を向き、同じ願いを持って意識しながら取り組みを進めていった。

3.私と山形県との出会い

私は熊本県で生まれ、三重県で育った。東北地方に全く縁のなかった私が、山形県出身の恩師と出会うことで、それまで知ることのなかった山形県のことを知ることができた。また、山形県を少し身近に感じ、興味深く思える経験もしてきた。

毎年8月に行われている「花笠まつり」に参加した際には、何百人もの人が一糸乱れずに一体となって踊る姿に感動し、祭りを楽しむと同時に、私もあの中の一人として踊ったら気持ちが良いだろうなという思いになった。どうして、あのような素晴らしい演舞ができるのかと考えた時、自分の都合だけで動かずに、相手のことも考えながら動いているからだということに気づいた。それは、学年で大事にしようとしていた、相手のことにまで気持ちを向ける優しさと、相手と自分の都合の折り合いをつける賢さがないと成り立たないのではないかと思った。花笠踊りは、まさに4年生の子どもたちとの学年目標と繋がっているように感じた。大阪で花笠踊りを行い、子どもたち自身に友だちと一体になっていく心地よさを感じさせ、保護者の方には学年が一つになっていくところを見てもらいたいと思い、花笠踊りに取り組むことを決めた。4年生は、社会科の学習で都道府県を学び、音楽科の学習で民謡を学ぶ。その中に、花笠音頭も含まれている。だからこそ、他の学びとの繋がりを考えても、4年生で花笠踊りに取り組むことはぴったりだと感じた。

この取り組みの原点さえも、まさに私自身の人との出会いと、本物に触れることから得られた感動であると言える。

4.本物に出会うことの良さ

私が花笠まつりに参加して感動したように、本物に出会うことは、子どもたちにとっても以下のような大きな効果があると考えられる。

- ・他者の生き方にふれることができる
- ・今まで知らなかった新しいことに対して、憧れを感じることができる
- ・自分もやってみたくてモチベーションが上がり、目標となる

そこで、山形県大阪事務所を訪ね、大阪で花笠踊りを教えてくださる方を紹介していただいた。子どもたちには、私が出会った花笠踊りのことについてビデオや写真、本物の花笠を見せながら話し、もっと

優しくもっと賢くなるために取り組んでみないかと提案をした。

【取り組むことが決まった後の子どもたちの意見】

- ・山形県の花笠をおどれるのがうれしい。自分たちで一生けん命花笠を作って、一生けん命おどりたいです。お家の人が、「みんながそろっている」や「かっこいいなあ」と思ってもらえるようにおどりたい。
- ・一回テレビで見たことがあるから私もおどってみたいなあと思っていました。だからおどるって聞いて、早く自分がおどりたいと思いました。
- ・山形県の花笠をおどっている人が、何百人ものすごい人数で、バラバラにならずにおどっているから、4年生全員でバラバラにならずにおどりたいと思いました。
- ・山形の花笠おどりは「聞いて、見て、笑顔になれる歌だなあ」と思いました。運動会でおどれることになって、「やったー！おどれるんだ！」と思いました。おどるのはむずかしそうだけど、「みんなが笑顔になってくれたらいいな」と思いました。

前向きな意見が多く出されたのは、本物に魅力があったからだと思う。やるかどうかを決める時、「ぼくはできるかどうかわからないから嫌」と言う子どもが一人いた。その子に対して、「今までもできないと思ったことがあったけど、最後はできるようになったよ」、「みんなでやったら楽しいよ!」、「できないところは一緒に練習するから!」という声が上がリ、その子どももうなずいて最終的には全員で取り組むことに決まり、山形県人会から花笠踊りの先生が来てくださるのを、子どもたちみんなが心待ちにするようになった。

5.山形県からのおくりもの①

花笠踊りの先生に来ていただいて、本物の花笠踊りを見せてもらい、子どもたちは体得しようと紙でできた練習用の笠を使って、一生懸命練習していた。初めはぎこちなかった子どもたちも、1時間ほど練習することで踊れるようになり、「本番まで一生懸命練習するので、本番も見に来てください」と言って別れた。

毎日練習をする子どもたちの姿は、真剣そのものであった。休み時間に、教室で円陣を作って踊る子、家でもクッションやまくらを持って練習に励む子もいた。Aもひたすら音を覚え、先生や友だちから手取り足取り動きを教わって体得し、みんなと同じように踊れるようになった。



山形県人会の方による指導

6.学年の動きが一つになるために

個々の踊りが大体そろってきたところで、行進しながら踊る花笠踊りの隊形を、私はどンドンと変えていった。子どもたちは練習を重ね、踊りながら上手に隊形を変えていけるようになった。直線から小さな円陣を作り、学年の大きな円陣を作り、二重円を作る。それを子どもたちの前で指導していて、どンドンと上手になっていくことに喜びを感じつつも、全盲のAも含めてどうしてあんなに上手く移動できるのだろうかと思議に思うようになった。そこで子どもたちの近くで指導してみると、隊形移動をする際に子どもたちなりの考えがちりばめられていることに気づいた。

後ろの子どもが、「もう少し右!」「そうそう!」などと声をかけて動いたり、Aや近くの友だちの動きに合わせて自分が歩く足の歩幅や角度をその時々微妙に調整したりして、全体としての隊形がきれいに保つように工夫していた。これこそ、学年が一つになることであり、私が目指していた「もっと優しく」「もっと賢い」姿だと感じた。



【本番を終えた子どもたちの感想】

- ・初めて花笠音頭を教えてもらった時は、すごくむずかしくて「ちゃんと本番でおどれるのかなあ」と心配だったのですが、ていねいに教えてもらったので、すごくうれしかったです。4年生全員で円になっておどるときに、山形の人が「(見本になるために)前に行ってあげようか」と聞いてくださってうれしかったです。
- ・中島先生に運動会でおどってみよう学年集会の時に言われました。みんなやろうと立っているのに、ぼくだけは立てませんでした。けど、みんなが花笠お

どってみようと言ってくれたので、立てました。おどる先生が来ました。プロのおどりの人みたいで、それを見ていたらぼくもやりたいと思いました。

・9月に花笠音頭を教えてもらった時は、むずかしそうと思いました。でも、だんだん練習していると楽しくなってきました。あと花笠を教えてくれた人が「自分のことだけじゃなくて、人のことも考えることが大切」と言っていたので、そのことは花笠だけじゃないと思いました。

・「花笠」というおどりと、そのすごさを教えてもらった。日々の練習を積み重ねて、みごと本番に大成功しました。「花笠」の楽しさや素晴らしさを感じました。「一つになるにはどうすればいいか」ということを考えながらおどることができました。

7.山形県からのおくりもの②

花笠踊りに取り組む中で、子どもたちは心地よい達成感や満足感を感じ、山形県に親しみを持つことができるようになった。社会科の学習で都道府県名を一つずつ覚えていった時も、覚えることの苦手な子が「俺、山形県だけは分かる!」と得意気だった。「山形県調べ」を行い、たくさんの資料の中から必要な情報を選び取り、読み手のことを考えてまとめる工夫をした。それは、5年生での「世界の国調べ」に繋がった。

おいしい山形推進機構主催の山形県産農作物食育活動支援事業にも参加し、2年間にわたって5種類の果物と米と花を送っていただくことができた。子どもたちは、「山形県調べ」で学んだ有名な農作物の本物の味を知ることができ、とても喜んでいて。それ以来、「スーパーで山形のリンゴ売ってた!」「山形県のラ・フランスをもう一度食べたくて買いに行った」と教えてくれるなど、産地について興味を持つ子どもが出てきた。



山形県調べをした子どもたちの作品

また、5年生では社会科で米作りを学ぶ際、教科書に庄内平野での新しい米の品種である「つや姫」作りの様子が紹介されており、このことも前年度の「山形県調べ」と繋がった。実際に「つや姫」も送っていただいて、家庭科で調理実習する際に炊き、味わいながら農

業に対する理解を深めることもできた。さらに、5年生の終わり頃には山形県庁から農業についての出前授業に来ていただき、2年間おいしくいただいた果物や米がどのようにして作られているのかということ詳しく教えていただいた。

出前授業に来ていただくことが決まった時、何かお礼ができないかと子どもたちに相談したところ、「感想を言う」、「歌を届ける」という意見が出される中、「山形県の人と一緒に花笠を踊ろう!自分の県の踊りを大阪で踊れたら嬉しいと思う」という意見が出た。その意見を聞いた子どもたちは「やったー!」「良いなあ!」と心から賛成したようで、次の日から1年以上前に作った花笠をほぼ全員が学校へ持って来だした。再び花笠踊りをする機会が得られたことに私は感無量だったし、自分が作った花笠を子どもたちがずっと大事にしていたことも分かり、とても嬉しかった。何よりも、子どもたちが山形から来る人のことを考え、喜んでもらおうと考えをめぐらし、花笠踊りを選択したことが素晴らしいと思った。

8.子どもたちが学んだこと

子どもたちは、大阪から遠く離れた山形県からのいくつもの“おくりもの”を通して、人として成長するにあたって大切なものを得ることができた。花笠踊りを通して、人のことを考える優しさ、相手のことも併せて考えられる賢さ。一つになることの心地よさ。初めて出会う花笠踊りの先生たちから、自分とは違う人のかっこよさや、人の温かさ。本場の果物の味覚と、それを作る人の苦労や工夫。本で知ったことを実際に体験して学ぶこともできた。そして、人との出会いによって、新しい世界を知り、人の気持ちに思いを馳せるようになり、自分たちの頑張りやアイデアから相手を喜ばせようという気持ちも高まったように思う。

【出前授業を終えての感想】

- ・山形県からの出前授業で、おいしい果物づくりでの工夫やペロリンのことを教えてもらって、さらに山形のことを知れた。山形県の農家の人の苦労を知って、すぐ果物づくりにこだわっていると思った。
- ・社会科の学習で一度したことのあるお米のことを、さらにくわしく山形県ならではの工夫などを知れたので良かった。山形県の果物のおいしさのウラには、いろいろな工夫や、農家の方々の苦労が知れてとてもありがたく思った。
- ・山形県の人に出前授業をしてもらい、最後に花笠をいっしょにおどってくれたのでうれしかった。歌も聞いてくれて、泣いている人がいたので良かった。

9.おわりに

この2年間の取り組みの中で、山形県をベースに一つのことを追求し、多角的に学び、知識を積み重ねていくことの楽しさを子どもたちは感じてくれたようだ。いくつもの山形県からの本物の“おくりもの”によって今まで知らなかった世界を知り、そこに暮らす人へ思いを馳せ、教科書に書かれてあること以上に人の気持ちなどを想像することができるようになったと思う。

私自身が学び、体験したことを子どもたちに伝えたとしても、今回ほど子どもたちに強いインパクトを与えることはできなかったと思う。本物と出会うことは、学校で伝える以上の成果が期待できると実感した。本物と出会った子どもたちは、初めて出会う人にも温かさを感じ、「人って親切にしてくれる」、「人って信じて良いんだ」という思いを強く感じてくれたことだろう。これからも、公教育の授業の場でこそ、より良い出会いと体験を作っていくように私も働きかけていきたい。